第29号　2024.10

ボランティアグループがつくる和歌山県ジェンダー平等推進センターの書評誌

この本よんだ？

～りぃぶるBOOKプラス～

定年後

楠木新 著　中央公論新社　2017年（K：エッセイ・文学）

誰もがいつか迎える定年。自身も定年退職した著者が、退職者などへ取材をし、主に仕事だけをやってきた男性の定年後の生活を中心に書いている。女性は仕事だけではなく、その他のことと調整しながら何とかやってきたから、定年後の生活は大丈夫だと書かれているが、女性の働き方も大きく変化しているので大いに参考になると思う。

著者は「人生後半が勝負、60歳から75歳は黄金の時代、終わりよければすべてよし」と言っている。定年後の時間と労働時間を比較すると、60歳で退職し、75歳までの自由時間は1日11時間。75歳を越えると介助を受ける立場にもなるので半分の 5.5 時間。85歳まではほぼ8万時間になる。これは20歳から60歳まで40年間働いた労働時間よりも多い。「これほどの自由時間を有効に使うか持て余すかの差はとても大きい。」とのこと。本の中で私が印象に残ったのは、夫が明るく柔らかい感じの夫婦はコミュニケーションがよく、夫が不機嫌な夫婦はコミュニケーションが悪いように思えたというところだ。まさにその通りではないか。この本は退職するか、継続雇用で働き続けるかの選択肢にもなる。

（はんちゃん）

ママ、怒らないで。

斎藤裕・斎藤暁子 著　ﾃﾞｨｽｶｳﾞｧｰ・ﾄｩｴﾝﾃｨﾜﾝ　2021 年（F：子育て（こどもの権利））

素直なタイトルに惹かれて手に取った本書ですが、その内容は私にとってなかなか厳しいものでした。

私はよく、「早くしなさい」などと自分のこどもに怒ってしまいます。なぜ、怒ってしまうのでしょうか。こどもが悪いのでしょうか。この本には、「子どもには自分の気持ちやペースを尊重してもらう権利がある」と書かれています。彼らを最優先することが親の責任であるとも書かれています。では、怒らないためにどうすればよいのでしょうか。対症的なノウハウを実践するだけでは根本的な解決にはならないようです。本書によると、親である自分が幼かった頃に抱えた悲しみや怒りを明らかにし、その時の心の傷を回復させる必要があるようです。自分のつらかったことを思い出すことも、「親の責任」を自覚して覚悟を決めることも、とてもしんどいことです。しかし、変わりたいと思っている私にとって示唆に富む本でした。　（A.T.）

家事労働ハラスメント

竹信三恵子 著　岩波新書　2013 年（A：フェミニズム）

著者は「女性がなぜ働きにくいのか？」という問題を考えたところ、「家事労働」について考慮されていないからではないかと考えた。昔は、「夫は仕事、妻は家事」ということで男性に一家を養うだけの給料が支払われ、女性の家事には対価が支払われなかった。社会が変化し、女性も結婚後も仕事をするようになったが、女性のつける仕事や給料、特に家事・ケア労働に対して正当な対価が与えられているか？そのことが、女性の貧困問題や低賃金、非正規問題につながっている。

著者は新聞社で労働や貧困問題に取り組んだ後、現在は大学教授である。本書では東日本大震災後の女性について取材をした内容もあるが、りぃぶる所蔵の『女性不況サバイバル』（岩波新書、2023年）ではコロナ下で影響を受けた女性のことも取材している。『10代から考える生き方選び』（岩波ジュニア新書、2020年）なども参考に今の時代にあった社会のあり方について考え直す時がきているのではないか。　（か）

夜明けのすべて

瀬尾まいこ 著　水鈴社　2020 年（K：エッセイ・文学）

藤沢美紗は、PMS（月経前症候群）のため、月に1度自分ではコントロール出来ないくらい苛立つときがある。ある日、転職してきたばかりでやる気がないように見える山添孝俊に苛立ちをぶつけてしまう。孝俊もまた、社会人になって半年でパニック障害となり、1日何事もなく過ごすことに精一杯で、自分が好きだったことやりたかったことを忘れてしまっていた。孝俊が会社で発作を起こしているのをきっかけに、2人はお互いのことを徐々に知っていく。人はみかけではわからない、それぞれ何かしらの問題を抱えながら生きている。PMS やパニック障害が日常生活にどのように影響するのか詳しく描かれており、とても読みやすかった。

「夜明けの直前が、一番暗いって。」…今が人生で一番の暗闇だとすると、これから夜明けだよと言われているような前向きになれる1冊です。　（めい）

偶然の家族

落合恵子 著　東京新聞　2021 年（K：エッセイ・文学）

著者は、こどもの本と女性の本の専門店等を核とする「クレヨンハウス」を主宰しています。こどもの文化全般に寄与した功績に対し第55回 ENEOS 児童文学賞を受賞しています。

本著は1990年に刊行されました。編集者は、時代は平成から令和に変わり、この作品が描いた一人ひとりの人間と多様性の尊重、共存の願いがどこまで実現されたのか問うために復刊したと述べています。同性の恋人達、離婚歴のある男性、両親に愛されなかった女性、母親の束縛が強かった男性、婚家に馴染めずにこどもを連れて離婚した女性が“榠樝（かりん）荘”で共に暮らしています。この住人達はそれぞれ心に傷を負った過去があります。だけどその傷を丸ごと引き受けて生きています。さまざまな背景を持つ血の繋がらない“家族”がお互いを尊重して生活している様子が描かれています。

紛争や震災など私達を取り巻く環境は日々厳しさを増しています。本著のように血縁がなくても互いを“家族”と思える関係が増えたら、社会も人間関係も拓かれていくのではないかと考えさせられました。　（Ma）

推し、燃ゆ

宇佐美りん 著　河出書房新社　2020 年（K：エッセイ・文学）

あなたに「推し」はいるだろうか。この小説において、推しは推しであり、主人公の現実に干渉することは決してない。それでも主人公にとって推しの存在は救いであり、その一方的な関係性は、現代の推し文化を残酷なまでにリアルに描いている。この令和の時代に推しを推した経験がある人なら必ず共感できるだろう。

主人公は生き辛さを抱えながら、推しに希望を見出し、困難な日常生活を頑張って過ごしている。その姿は健気で応援したくなる。しかし、推しが『燃えた』ことをきっかけに、推しの転落と共に主人公の現実も厳しくなっていく。主人公は推しに苦しみ、推しという支えが不安定になったことで更に現実に苦しみ、主人公の現実は次第に行き詰っていく。

ラストの推しとの精神的な断絶と、それによって主人公が初めて一歩を踏み出そうとするシーンがとても叙情的で美しい。文体も瑞々しくポップで読み進めやすく、現代の等身大な青春小説としても親しみやすい内容なため、是非気軽に手に取ってみてください。　（菊山）

魔法少女はなぜ世界を救えなかったのか？

ペク・ソルフィ　ホン・スミン 著　渡辺麻土香 訳　晶文社　2023 年（A：フェミニズム）

「魔法少女」とは、魔法を使う少女が主人公の、日本のアニメのジャンルのひとつである。著者の2人は韓国人であり、本書は韓国文化について書かれたものであるが、日本文化に由来する内容も多く面白く読める。15章で構成されており、内容は魔法少女についてだけではなく、他にディズニープリンセス、少女小説、アイドルについて書かれている。

「はじめに」で著者は、大人になって少女向け作品を見返したとき、何となく相いれない複雑な感情が湧いてきたという。魔法少女は少女に自信を持たせるものなのか、性役割をすり込むものなのか、と。本書はフェミニズムの視点からサブカルチャーを捉えなおし批判したものと言える。　（O.S）

杉森くんを殺すには

長谷川まりる 著　おさつ 絵　くもん出版　2023 年（K：エッセイ・文学）

さわやかできれいなブルーの装丁に可愛いイラスト。なのに対照的な、なんとも刺激的なタイトル。

物語は、杉森くんを殺すことにした高校1年生のヒロから、兄のミトさんへの電話から始まる。ミトさんからのアドバイスは、『一、やりのこしたことをやる。』『二、杉森くんを殺さなきゃいけない理由をまとめておく。』だった。

ヒロは貯金箱を壊して漫画をごっそり買い、クラスメイトを遊園地へ誘い、杉森くんを殺す理由を15個リストアップする。「杉森くんは私に依存している」「邪魔だ」「わたしのことをバカにしている」「わたしを精神安定剤みたいにして、利用した」。前半は杉森くんの嫌なことばかりが記されるが、後半から少し変わってくる。「わからない」「わたしが楽になるため…」。

ヒロの心の揺れ。他人との距離感。依存と自立。喪失し、人と出会い、つながり、やがて心を取り戻す、そんな物語。巻末に相談先情報や、参考になる本やサイトの紹介あり。　（み）

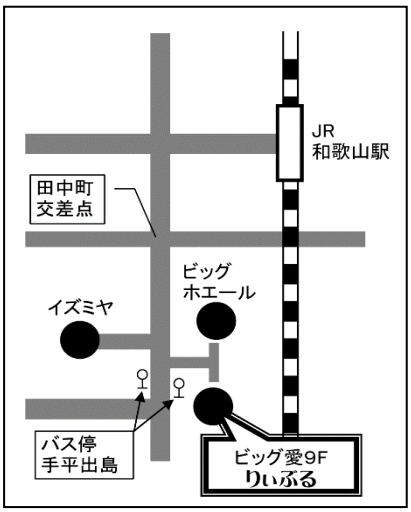
破婚　１８歳年下のトルコ人亭主と過ごした１３年間

及川眠子 著　新潮社　2016 年（K：エッセイ・文学）

まず聞いたことのないタイトルと表紙の強烈なイラストに引き付けられる。サブタイトルでの期待は裏切られることがない。各章の見出しだけ並べても、「天使が去ったあと」「安らぎとの破局」「カルチャーショックに撃破されて」「最後のお願いは破産するまで？」「愛という名の破格な投資」「破壊されていく心」「サクラマジック」…ワクワクする。

カルチャーギャップを乗り越えて結ばれた二人だが、最終的に夫は「残酷な天使ならぬ残忍な悪党、もしくは非道な詐欺師と化して」しまう。「彼のために使った金額は約三億円。トルコに消えてしまった」「離婚時に私が背負った借金は総額七〇〇〇万円」。とんでもない目にあっているのだが「彼といたことで何ものにも替えがたい経験をさせてもらった」と大きな心で総括している。

作者及川眠子（おいかわねこ）さんは1960年和歌山市生まれ。「淋しい熱帯魚」や「残酷な天使のテーゼ」の作詞で知られる。藤戸台小学校の校歌も手掛け、龍神村に事務所の登記を移している。彼女のファンのみならず、国際結婚に関心のある方、離婚に要するエネルギーを感じたい方はもちろん、たまたまこのペーパーを手にされた方にも強くお勧めしたい。　（紀生）



この本 よんだ？　第 29 号　（2024 年 10 月発行）
◇企画・発行　りぃぶるぷらす
◇協力　和歌山県ジェンダー平等推進センター“りぃぶる”

【編集後記】

このたび「み」さんが、新しく入られました。1年前に退職され、近くに住まれているのでラジオ体操に参加されるなどビッグ愛にはよく来られています。りぃぶるの読書会に参加されて知られたそうですが、本が好きとのことで今後が期待される方です。お楽しみに。

★あなたも書評を書いてみませんか？ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。　E-mail　libreplus@yahoo.co.jp